

平成30年度 入学試験問題

国語

(60分)

〔注意〕

-
- ① 問題は㉑～㉓まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題用紙の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入のこと。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入のこと。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

白

紙

問題は次のページから始まります。

一 次の文章は山折哲雄『へひとり』の哲学』において、和語「ひとり」が持つ本来の意味を、「孤独」「個人」などの漢語の意味との比

較を通して考察した一節である。本文を読んで、あとの問いに答えよ。

かつてわれわれの社会には「備えあれば患いなし」という言葉が生きていた。さらに「人事を尽くして天命を待つ」という信念も ^ア メイミヤクを保っていた。

今日、われわれの国もたしかに四方から襲ってくる危機や災害にたいして万全の「備え」をほどこし、国民の総力をあげて「人事を尽くそう」としている。

けれども、それならばわれわれはそのことによってはたして「患いなし」の心を抱くことができているだろうか。「天命を待つ」の覚悟が定まっているのだろうか。

もしも安心、安全ということをいうのであれば、そろそろそのようなことにも思いをいたすべきときがきているのではないだろうか。そしてそのときはじめて、日本人の「死生観」がどのような歴史の風雪に耐え、今日まで生きのびることができたのか、あらためて [▲] 噛みしめることができるのではないかと思う。

備えあれば患いなし

人事を尽くして天命を待つ

このようなわれわれの死生観は、想定外の事態にたいしてしばしばもちだされる「不条理」^②とか「偶然性」といった西欧産の思考法とは本質的に異なる来歴をもつていたことに注意しなければならぬ。

それにしても「死生観」とは、不思議な言葉ではないか。

よく考えてみると、そんないい方が中国語にはないことに気づく。「生死」といった表現が漢語文献に登場しないわけではないが、「死生観」となるとそれに対応するような言語表現はみられない。また、ヨーロッパのどこの言語においても見出すことができないのである。

死と生と二文字に分けて表現する例はいくらでもあるだろう。しかしそれを一体化して「死生」といったり「死生観」と表記したりするのは、この日本列島が演出した独自の思想だった。それを今、私は過去形で語ったが、しかしそのような意識は今日のわれわれの社会では失われはじめてるように思われる。

「死生観」とは、文字通り死が生と背中合わせになっている消息をいい、ただごとでないことをいおうとしている。その上、死が生

に先立って提示されているところも気になるところだ。

この日本人の死生観を忘却のかなたから蘇よみがえらせる上で、あの3・11の大災害はやはり大きな意味をもっていたと思う。われわれは突然、数知れない死者たちの前に引きずり出され、意識の底に押しこまれていた過去の記憶に直面させられることになったからだ。

あらためて思うのであるが、^③今われわれは「挽歌ばんか」の季節を迎えているのかもしれない。挽歌とは、もともと死者というよりも、死者の魂にむかつて語りかける心の叫びであった。それが古代万葉人の作法であり、先祖たちの日常における暮らしのモラルだった。それを今日のわれわれの社会は「終活」といったケイハクケイハクな言葉で呼ぶようになってしまった。

それというのものはや死者の魂の行方にリアルな想像力をはたらかせることができなくなっているからなのだろう。遺体という死の現実を前にして、ただ呆然ぼうぜんと立ちすくんでいるだけではないか。

もつとも人々は、死者を祀まつる仏壇の前で手を合わせ、遺影や遺骨、そして海辺に打ち上げられる流木などにも死者の気配を感じ、神経を集中する。ときに夢の中にそれを求め、一瞬の安らぎを覚える。雪や雨、そして目に見えない放射能の中にさえ死者の身みじろろぎぎを感じてもいる。

苦しみの一年が過ぎ、悲しみの一年がつみ重なっていくうちに、野をわたる風が死者の声を運んでくれる。山中の樹木のあいだに亡き人の姿が立ちのぼる。

陽ひに輝く海のかなたからも、なつかしい人の言葉がきこえてくる。われわれが発したはずの挽歌の聲が、まるでブーメランのように死者の側から逆にとどけられる。それが心の癒いしの循環をつくり出す。

人はひとりでこの世に生れ、ひとりで死んでいく。それが、先祖が今日まで守り抜いてきた死生観の根元的な作法だったということだ。死生観という不思議な言葉にひそむ核心的なモラルだった。和語で表現される「こころ」の宇宙を内側から満たす日本列島人の人間観だった。さらにいえば世界観だったといっている。

しかしながらその「ひとり」で生き、そして死んでいく「こころ」の居場所が今やいたるところで揺らぎはじめている。「こころ」の居場所が揺れていれば、「ひとり」という存在の座標が定まるはずはないだろう。

やはり「こころ」の戦後史、といったことを考えなければならぬときがきているのかもしれない。それについてはこれまでもすこしはふれてきたが、「こころ」という言葉の変遷史ともそれは重なっている。

まず記憶にのこるのが、いつごろから「稲作」というかわりに「コメ作り」というようになってしまった。秋の実りを祝い楽しむ

かわりに、車をつくるようにコメをつくる時代がやってきたのである。

その風潮ときびすを接するよう広がっていたのが、食べ放題、飲み放題の店の全国展開だった。食べすぎ食べのこしが日常茶飯の
ことになり、ついに日本は食品廃棄物発生量世界一の汚名をこうむるにいたる。

「腹八分」という大和ごころ、大和ことばが死語と化す時代がはじまっていた。消費の選択がはてしなく広がり、使い捨てと部品交換の意識に苦しむ人間が、いろんな層に急激にふえていったのもそのころだった。

そういえば、いつごろからか「ツール」や「スキル」といった言葉が流行りだしていた。どんな道具をつかい、どのように技術をアップさせるか、要するに数値化されただけの目標を立ててあくせくする。それを追いかけるようにハウツーものの全盛期がやってきた。

あわてたわれわれの社会は、物の豊かさにたいする心の豊かさ、といったスローガンを口にするようになったが、時すでにおそし。あとからやってきた次世代の子どもたちは、それこそ物ごころがつきはじめたころから、その物と心がすでに分離してしまっていることを知らされることになった。

「ごころ」の戦後における変遷史、ということになれば、忘れたい思い出がある。ここではそのことにふれておこう。責任を他に
テンカすることなく、まずはおのれの心の内をふり返ってみるためにもそれは欠かせない。

よくいわれることであるが、戦後の日本人のあいだでよく読まれた本に中根千枝氏の『タテ社会の人間関係——単一社会の理論』（一九六七年）と土居健郎氏の『「甘え」の構造』（一九七一年）がある。ともにロングセラーの人気をえて、その話題は今日でも人々の口の端にのぼる。

もっともこの両書には、批判や誤解をふくめてさまざまな評価が下されてきた。広汎な関心を呼んだのだから当然のことだったが、新しい世紀を迎えるころになってジャツカンの異変が生じた。

一方の『「甘え」の構造』が、ちょうど二〇〇〇年の境目のあたりから話題にならなくなったからだ。そのことに気がついた著者の土居氏が、二〇〇七年に刊行された増補版の書き下し論考（「甘え」今昔）のなかで、そのことにふれている。

要点を記すと、自分のいう「甘え」とはほんらい、日本人における特別に親しい二者関係を前提としている。つまり、相手あってこそその「甘え」である。「相手」が自分にたいし好意をもっていることがわかっていて、それにふさわしく振舞うことが「甘える」ことだ。

ここで肝腎なのは相手の好意がわかっているという点である。この「わかっている」というのは体験して身に覚えがあるということ

であり、知的に認識されているということではない。

身に覚えがあればこそ自然に甘えるのであり、したがってこの際「私は甘えます」と言葉にする必要は全くない。^④「甘えている」という自覚すら伴わないことが多いだろう。

ところが著者は、このような二者のあいだの甘えの関係は、二〇〇〇年を越えるころから急速に失われてきたように思うという。

特別に親しい二者関係といえ、それは親子関係、夫婦関係、師弟関係、友人関係などであるが、それらの二者関係にとって重要な意味をもっていた「甘え」「甘えられる」の関係がまさに崩壊の危機に瀕している。

この「甘え」は一面で幼児心理に直結するが、だからといってとくに幼児的心理ではなく、老若男女の別なく人間一般に共通する心理として理解されていた。ところがその理解が急速に失われて、^⑤「甘え」といえば一方的な「甘やかし」か、ひとりよがりの「甘ったれ」のこととしか考えなくなったのだという。

私は最近、この土居氏の嘆きともとれる反省の弁を読み直してみても、なるほどそうだったのかと思った。

そういえばこの世紀の転換点は、まさにインターネットによる情報社会が一挙に巨大化した時期にあたる。二者関係の「相手」つまり「他者」の手触りがたんなる記号的なもの、メカニカルなものへと急速にその相貌を變じつつあった時代に重なる。

土居氏がすでに感じとっていた「甘ったれ」や「甘やかし」の現象が当り前のことになっている。新しいネット社会が出現していたのである。それはいつしか「ひとり」^⑥で生きる土壤をつき崩し、二者関係を内面的に支えていた「こころ」の風景を變容させることにつながったのだろう。

そのように考えたとき、もう一つのロングセラー『タテ社会の人間関係』の方はどうだったのか。この中根千枝氏の書物は、日本社会の構造を分析して、その最大の特徴がタテ軸を中心にすすめる「単一性」という性格にある、ということを一貫して主張するものだった。

一昨年増刷されたのがすでに百二十三刷を数え、帯には一一〇万部突破と書かれていた。そして周囲を見渡してみれば、日本社会がいぜんとしてタテ割り、タテ系列の構造のなかで推移していることが、いたるところで目につく。

戦後の論壇をにぎやかに飾った二冊の名著の、このような「セイスイイ」のあとをみると、一方で土居氏という「甘え」にもとづく二者関係がもろくも崩れ去り、他方の「タテ社会」の構造だけが今日なお強靱な持続力をもちつづけている光景がみえてくる。

その落差のなかにこそ、「ひとり」の存在を真綿でしめつけるように窒息させる危機の深刻さをみてとることができるかもしれない。

問一 波線部ア〜オのカタカナを漢字に直せ。楷書で丁寧に書くこと。

問二 二重波線部A「かみしめる」・B「身じろぎ」・C「きびすを接する」の意味として最適なものの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A 「噛みしめる」

- ア・深く考える
- イ・強くかむ
- ウ・見分ける
- エ・身にしみる
- オ・理解する

B 「身じろぎ」

- ア・存在感
- イ・もだえ苦しむさま
- ウ・さまようこと
- エ・体を動かすこと
- オ・戸惑うさま

C 「きびすを接する」

- ア・元の所へ戻る
- イ・続けて起こる
- ウ・同時に始まる
- エ・競い合う
- オ・示し合わせる

問三 傍線部①「そのようなことにも思いをいたすべきときがきている」とあるが、筆者が提案しているのはどのようなことか、その

説明として最適なものの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・社会に浸透した安全神話に隠されている危機について暴き出すこと。
- イ・想像力をはたらかせて準備を整え、危機を待ち受ける心境にいたること。
- ウ・対処の有無にかかわらず危機や災害が起こりうる事実を受け入れること。
- エ・変容していく日本社会における「こころ」の危機について覚悟を決めること。
- オ・天災や非常事態に対して考えられるかぎりの対策を社会全体で講じていくこと。

問四

傍線部②『不条理』とか『偶然性』といった西欧産の思考法とは本質的に異なる来歴をもっていた」とあるが、これはどういうことか、その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・自分たちができる限りの備えをしてことに臨むという日本古来の考え方は、他者の死にふれて個々が生の意義を学びとる日本特有の死生観に由来するものだという事。

イ・死を生に先立つものとして考える日本の考え方は、みずからの死を想定外の不条理として退ける西洋の考え方は命に対する考えを組み立てる過程が逆であるということ。

ウ・死と隣り合わせのものとして生をとらえる日本の考え方は、理屈に合わない事態を考えられないものとして退ける西洋の考え方は成り立ちのうえで異質であるということ。

エ・人知を結集して万全の備えを目指す日本古来の考え方は、非常事態を防げないばかりか事実としても認められない西欧由来の考え方よりも歴史と優位性があるということ。

オ・生と死を等しく価値を持った一対の存在としてとらえる日本の言語表現には、西欧には見られない漢字文化圏共通の大局的な物事のとらえ方が根底に流れているということ。

問五

傍線部③「今われわれは『挽歌』の季節を迎えている」とはどういうことか、その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・大災害で多くの人々が亡くなった事実を否認して安易な癒しを求めながらも、耳に響く挽歌の声に胸を締めつけられる人々が増えたということ。

イ・大災害によって、人はみな孤独に生まれ誰にも頼らずに生きていくという古代からの人生観を思い出すきっかけを与えられているということ。

ウ・大災害の被害を忘却せぬよう、今あらためて死者の心にもふれて癒しの循環をなす古代の生き方を振り返り、意識を高めるべきだということ。

エ・大災害で多くの人々が亡くなった事実と直面することで、生きるうえでの息苦しきについて社会全体で問題提起をする機会を得たということ。

オ・大災害によって、亡くなった人々の魂に思いを巡らせて安らぎを得る古代からの暮らし方を思い出すきっかけを与えられてい

るということ。

問六 傍線部④「そればかりか『甘えていゝ』という自覚すら伴わないことが多いだろう」とあるが、その理由として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・親しい間柄で相手が好意を向けてくれている実感から生まれる振る舞いは、意識的に生み出されたものではないから。
- イ・特別な二者関係では序列が明確なために甘えが一方的な依存の構造となつて、特段意識されなくなることが多いから。
- ウ・甘えの構造は幼児心理に直結するため、無自覚に依存するその感覚が一般の人間関係にも維持されることが多いから。
- エ・甘やかしてくれることが自明な相手には言葉も不要であるため、依存している実感を持ち続ける必要がなくなるから。
- オ・甘えの関係は相手が好意を寄せてくれる事実にかかわらず、相手に依存する体験として事後的に作り上げられるから。

問七 傍線部⑤「今や『甘え』といえは一方的な『甘やかし』か、ひとりよがりの『甘ったれ』のこととしか考えなくなった」とあるが、土居氏が指摘することの変化の直接的な理由を、筆者は何であると考えているか、四十字以内で説明せよ。

問八 傍線部⑥「『ひとり』で生きる土壌をつき崩し、二者関係を内面的に支えていた『こころ』の風景を変容させることにつながつた」とあるが、本文でいう「『ひとり』で生きる」とはどのようなことを指しているか、八十字以内で説明せよ。

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「私」は若くして北海道で中学校の教師をしていたが、刊行した詩集が高い評価を受けたのを機に、重病の父の反対を押し切って、学費を貯めて東京商科大学に進学・上京した。そこで下宿を紹介してくれた北川冬彦との交流のなかで、同人芸誌「青空」の中心人物であった梶井基次郎に会う。彼は当時二十七歳で、胸を病んでいた。

彼が、志賀直哉のものを書き写している、と言った時、私はすぐ、オレなら他人のものを書き写すようなことはしないぞ、と思った。それが屈辱的なことに思われたのだった。しかし、私は、自分も同じようなことをしていることに気がついた。私は三、四年前から、読んだ詩で感心したものは有名な詩人のでも、無名な投書家のでもノートに書き写す習慣を持っていた。そして私は、詩壇の有名さということと私の感心する詩とが、ほとんど関係がないこと、同人雑誌や投書の詩に案外にいい作品があり、著名な詩人の作品では取るべきものが少ないことに気がついていった。オレが選んでやるのだ、という気持ちで私は書き写していた。それは書き方を習うというよりは、オレの鑑賞眼を及第したものを取ってやるのだ、という誇りを感じる仕事であった。あれと同じことも知れない、と私は考え直した。しかし梶井の言った言葉の後半分を聞いたとき、梶井の言っていることは、それとも違うことが分かった。

彼の言っているのは、屈辱とか誇りということではないのであった。感心した作品を、原稿用紙に写して見ると、その作品が書かれる時の、書く人の心の動きそのものが具体的に分かる、という技術的なことであった。書くことの技術、その字配りの中にある氣息というものを理解しなければ何を言っても駄目だ、だからやって見るのだ、という技術的真剣さ、と言うべきものが彼の言葉に漂っていた。この男は、書くことそのことの実質をとらえようとしている、^①と思った時、私は自分の心の中に湧き出しかけていた「そんなことは僕はしませんよ」という言葉を押し戻さねばならなくなった。そして私は、志賀直哉というの偉い作家かもしれない、と思った。下宿へ戻ってから、梶井は、窓によりかかって、ボードレエルの話を私にした。彼の言っているのはボードレエルの散文詩のことであつた。私はそれを読んでいなかった。彼はそれを英訳で読んでいたのだつた。ボードレエルの散文詩がいかに素晴らしいものであるかを、彼は、その中の一篇である硝子売りの話を引いて喋った。

(中略)

梶井の語ったそのボードレエルの散文詩は私を魅惑した。さまざまな色の硝子が飛び散るといふのは、素晴らしいイメージだ、と私

は思った。後で私はボードレエルの散文詩を丸善で見つけ、まず硝子売りの話を捜して読んだ。ボードレエルは梶井が言ったように書いていなかった。硝子売りが持っていたのは、普通の透明硝子だけで、その透明硝子が飛び散った、という話にすぎなかった。私は本物のボードレエルよりも梶井の語ったボードレエルの作品の方が美しいのに気がついた。そしてボードレエルがつまらないように思われた。

夜になって北川冬彦が戻って来ると、梶井は北川の家でよく話をしていた。ある晩私は呼ばれて彼等の話に加わった。梶井が主な話し手で、私たちは十二時すぎまで喋っていた。腹がすいて来た、と梶井が言った。近くには店もなく、**A**もう夜中であった。私は自分の所に来た荷物（こうり）の中にスルメがあるのを思い出して、それを持って来た。スルメを食べながら、私たちは話しつづけた。梶井は伊豆（いず）で考えた空想的な作品のテーマを話し出した。北川が気にして、君は喋ってしまふとまた書くのをやめるんじゃないか、と言った。梶井は話が実に面白いが、作品のテーマを話してしまふと書くのをやめる癖があつて困るんです、と北川が前に私に言っていた。いま北川は、そのことを気にして梶井に注意したのである。梶井は、いや大丈夫だ、と言つてその話をした。

湯ヶ島（ゆがしま）で、春に桜の花が素晴らしく美しく咲いている。桜の花は、野外では本当に匂いがあたり一面に漂うものだ。その花を見ると、自分は奇妙な幻想に襲われた。それは桜の花の根や幹が透明になつて、地面の下まで透いて見える、ということだ。桜の幹の中にある数限りない細い管を、樹液が根の方から登つて行くのが分かる。そして根元には、地下に色々な動物の死骸が埋まっている。それは鹿や犬や猫や猿や鼠（ねずみ）や、色々な動物である。その動物の腐敗した身体の方に、桜の根が生き生きもののように伸びて行つて、毛細管がその死骸にからまつている。**B**その腐った死骸から養分を吸いとは上の幹から枝へ、枝から花へと送つて行つて、毛細管が

③「でなければ、あんなに桜の花が美しいわけではないんだ。これだから桜の花はあんなに美しいんだよ」と梶井が言った。私は聞いていて、彼の話（かえん）に感謝した。すばらしい話だ、と私は思った。梶井のその話を聞いてみると、桜の花が私の見て来たのよりもずっと美しく思われ、それ自体が生命の爆発であるように思われて来るのであった。北川も感動したように、そいつは、熱のさめないうちに、是非書いておけ、と梶井に言った。

そうして一月ばかり梶井基次郎と一緒にいるうちに、私はこの男の心の働きが次第に分かるようになった。彼の詩人的な傾向のある作品がどのようにして発想され、それがどうして発展するか、そして彼がものを書くということを技術的にどう考えて、どのように実践しているか、その大体が分かつてきた。桜の花の幻想は、彼の着想が生れる時の美事（みこと）の一つの例であり、ボードレエルの散文詩のヴァリエーションを自ら気付かずして作つて行っているのは、**④**彼が一つのイメージを養い育てる経過を示すものであった。三好達治の詩を口

にして見たり、通りすがりの西洋人の言葉を口にして見たりする形で、彼はさまざまイメージを取り入れ、描き直し、消化して自分のものにしていたのであった。そのようにして、彼は心内にイメージを絶えず培養し、豊かにし、育てている。それが作家としての彼の生活だったのだ。

私のこの生活は、六月の中頃に突然断ち切られた。私の父は二、三年前から胸を患っていて、私が東京に立つ前には大分悪化していたのだが、いよいよ危険だという電報が来た。私は部屋や荷物をそのままにして、夜汽車で上野を発った。私は青春期に入ってから父とうまく話をする事ができなくなっていた。言い争いすることはほとんど無かったが、私にとっては肉親の父親というものは、肉のつながりの故にうとましいものであった。私の身にあるいやらしいものは、皆父から伝わり、父のせいであるような気がした。

私は夜汽車の三等席の窓際の席に身を寄せて、もう父が危篤であり、生きているうちに逢えないかもしれない、と考えた。父は下士官から昇進して少尉になって退官し、戦争に二度出ていたので、軍人としてささやかな恩給を取っていた。また村役場に二十年近く勤め、その恩給ももらっていた。Cもし父が死ねば、それ等の恩給は三分の一ほどに減らされた遺族扶助料になる。それは、母や弟や妹たちは暮らしていくのに足りなかつた。私は学校をやめて働かねばならないかもしれないなかつた。学校をやめるのはいいとしても、私は学校を口実にして東京での詩人としての生活を始めたばかりであつたので、その生活をやめることになるのを何よりも怖れた。私は父が生きていてくれることを願つた。私は自分が父の犠牲になり、七人もいる弟や妹たちを養うためにだけ働かねばならなくなるのをいまましいと思つた。父の死を悲しむよりも、私は自分のために父がもう少し、もう二年か三年でも生きていることを願つた。⑤その考えは自分勝手なものであつたので、私はそんな考え方を自分の自分を厭らしいと思つた。D私の憂い、私の悲しみは、不透明な汚れたものになり、自分が一層いやらしくいまましく思われた。

私は座席に坐すわつていて居心地が悪く不愉快であつた。仙台下で客が大分下車し、新しい客が乗り込んで来た。私と向い合つて中年の女が坐り、その隣に僧侶じみた口髭くちひげのある男が坐つた。私の隣の席も中年の女で、三人は連れであつた。男は説教じみた言い方で、新興宗教の教理のようなことを喋つていた。聞く人の関心を寄せ集めるように、ことさら声を高くして言っているその男の話に、私は次第に耳を傾けるようになっていた。

その男は中年の、色の白い、よく太つた、自信ありげな態度の、新興宗教の説教師で、二人の女はその信者であることが分かつた。男の話は肉親の死んだ時に、遺族のものが死者の霊をどう感じたか、どんな悪い人間が死者の霊に導かれて心を改めたか、という話になつた。その話し方には、一見耳を傾けたものの心の弱い所を掴つかみ、引きずりまわし、自分の膝下に引き据すえてしまうような奇妙な力

があった。「どんな悪い心がけの人間でも」と彼は言い続けた。「その本来の素直な心の働きに目覚めるとですよ、自分の父、自分の母、自分の兄弟というものの愛情なしでは、人間は一日も生きて行けないことが分かります。その人が死んでごらん下さい。どんなにその人が自分にとって大切な人であったか、それが分かって来ます。死んでしまつてから分かるというのが馬鹿の特徴です。しかし」
彼がそう言った時、私は突然、いま自分の父が死にかけていること、そしてその父が一度も息子の自分に愛されたという記憶を持たずに死ぬのだ、ということを知った。(中略) たつた今も自分は、自分の都合のために父の早く死ぬことを ※ と思っていた。私は「お父さん、ゆるして下さい」と叫び出したくなつた。私は歯を食いしばつた。しかし涙が目から溢れ出した。大学の角帽をかぶり、制服を着た二十四歳の青年が人の中で泣くのはみつともない、と私は思った。しかし私の感情はもう溢れ出して、自分の意志で涙を留めることができなかった。涙は次々と溢れて滴り落ちた。私はハンカチを取り出して涙を拭つた。

二人の女と、その説教師がじろじろと私の方を見た。男はすぐさま、自分の説教師の効果を覚つたようであつた。彼は、ちよつと沈黙した後で、声を高めて言った。

「人というものは、みな善心を持つているもので、よい話を聞けばよい心が動くものです。私どもは、何の説明を聞かなくても、人が何を苦しんでいるかが、顔を見ただけで分かります。」

私はためらつた。自分はいま、この男の説教によつて改心したと思われている、と私は思った。それが私にやり切れない思いをさせているのだ、と思うと、私は居たたまらない屈辱感に襲われた。私は自分自身の心の働きで泣き出したのだ。私の心の破れ目が、この男の話で刺戟されたのは事実である。しかしその働きは、本来の私のものだ。父親というものを生理的に忌み嫌う青年の苦しきさなんかお前に分かるものか、と私は思った。

私は涙の溢れている目で、その説教師に向つて言った。

「私のことは何もあなたの話とは何の関係もありません。私に構わないで下さい。」

そう言ったときの自分の声が泣声であつたことを私は残念に思つた。しかしそう言うってから、私は少しずつ落ちついた。私は窓の方に顔をそらしてじつと涙の発作の鎮まるのを待つた。私の隣にいた女が、その説教師に向つて、

「強情な人間には、中々お救いが下らないものですね」と言った。説教師は何か短い言葉で答えてから黙り込んだ。

私は前にも、中学校の教師をしていた時、酒席で意地の悪いことを同僚の中年の教師に言われた時に泣き出したことがあつた。発作

的に泣くという経験はこれが二度目であった。馬鹿なことだ、恥かしいことだ、と思いながら、私にはある簡単な言葉で突かれると自己を抑えられなくなる泣き所があるらしかった。一体それは何だろう。二度とも、自分が軽蔑している人間の単純な言葉使いで私は自己抑制を失ったのだ。一体それは何だろう？ どういうことが私を破れさせることだろう。それが分からない。単純な悪に、それから型どおりの偽善的な説教の形式、そういうものに私は破られたのだ。それを考えて見よう。泣き出すなどということは、案外機械的な単純なことなのかも知れない。少なくとも私の経験では、泣くということは、本当の苦しみや本当の感動とは関係がなかった。それはある特定の場所に鍵をさし込まれると、涙の潜っていた扉ががちりと開くの似ていた。それを考えて見よう。それが分からなければ自分が文学をやっているのは何のためだか分からなくなる、と私は思った。

(伊藤 整「若い詩人の肖像」による)

問一 文中の空欄 **A** ~ **D** に当てはまる接続語として最適なものの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、一つの記号は複数回選べないものとする。

ア・しかし イ・そして ウ・そのために エ・つまり オ・それに

問二 傍線部①「志賀直哉というのは偉い作家かもしれない、と思った」とあるが、「私」がそのように考えた理由の説明として最適なものの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・志賀の文体が作品を書くことの実質をとらえようとしているから。
- イ・梶井が作品を書いた心境の追体験に真剣になっている作家だから。
- ウ・詩文に対する梶井自身の誇りや鑑賞眼を信じてみたくなったから。
- エ・志賀の文体が気にかかり、作品の氣息を理解してみたくなったから。
- オ・北川が紹介した梶井の言うことに間違いはないだろうと思ったから。

問三 傍線部②「そしてボードレエルがつまらないように思われた」とあるが、その説明として適切でないものを次の中から一つだけ

選び、記号で答えよ。

- ア・ボードレエルの詩を分析する梶井の才能に少しづつ魅了されはじめているということ。
イ・ボードレエルの詩ではなく梶井の言葉そのものが持つ文学性に気が付いたということ。
ウ・ボードレエルの詩よりも梶井が描き直したイメージの方に興味を持ったということ。
エ・ボードレエルの詩について論じている梶井自身の言葉に真実味を感じたということ。
オ・梶井が語るほどにはボードレエルの詩について心酔することはなかったということ。

問四

傍線部③「でなければ、あんなに桜の花が美しいわけではないんだ。これだから桜の花はあんなに美しいんだよ」とあるが、これはどういうことか、その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・湯ヶ島で見た桜の花のあまりの素晴らしさを見て、後になってそれを説得するだけの理由を空想したということ。
イ・様々な動物が生きる湯ヶ島の野外の様子を見ることで、桜の花の匂いのかぐわしさの理由が分かったということ。
ウ・地中に眠る動物の身体の腐敗したさまから、湯ヶ島の桜の花が非常にかぐわしく咲く理由を着想したということ。
エ・桜の花が素晴らしく咲き誇ることによって、地中に埋もれた生物の命が循環することを空想したということ。
オ・桜が美しく咲くさまをきっかけにして、様々な動物が暮らす湯ヶ島の自然の素晴らしさを印象づけたということ。

問五

傍線部④「彼が一つのイメージを養い育てる経過」とあるが、この「経過」の説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア・様々な風景を心の中に取り込んで、聞き手を魅了する関係性を作る情景を生み出すということ。
イ・目に映る日常的な風景と自分の想像とを掛け合わせて、印象的な情景を作り上げていくこと。
ウ・作品中の言葉をくり返し味わうことで、作家の内面における創造力の働きをなぞっていくこと。
エ・自分の基準を満たす作品を収集しつつ、その表現を深く理解して自分の情景描写に生かすこと。
オ・作品から想起させられた情景自体を、自分の言葉による表現のなかに引き継いでいくこと。

問六

傍線部⑤「その考えは自分勝手なものであった」とあるが、なぜ「自分勝手」だといえるのか、六十字以内で説明せよ。

問七 文中の空欄部 ※ に当てはまる本文中の語を単語一語で抜き出して答えよ。ただし、活用形は問わない。

問八 傍線部⑥「私は自分自身の心の働きで泣き出したのだ」に表れている「私」の心情の説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・自分が自立する意志を貫くからこそ父を哀れんで泣いているのに、説教師の言葉通りに改心していると思われることに自尊心を傷付けられている。

イ・発作的に泣くのは感情に関わらない自分の癖であるのに、言葉で改心させたいと思い込んでいる説教師の傲慢な態度に嫌悪感を覚えている。

ウ・苦しみや感動などの感情の動きとは全く関係なく涙を流してしまう自分を話で刺激し改心させようとしている説教師に対して敵意を露わあらわにしている。

エ・涙を流したのを屈辱に思っているため、それを引き起こした内面の動きは自分自身の意志で制御できるものであってほしいと願い、強がっている。

オ・回復を願う息子の気持ちもむなしく亡くなるうとする父を思っ泣いているのに、それを説教で改心させた結果と考える説教師の浅はかさに腹を立てている。

問九 本文の内容や描写についての説明として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア・桜の花のエピソードによって、受け入れたイメージを自分の言葉によって美しく育てていく梶井基次郎の詩人としての才能を伝えている。

イ・一般の女性が「私」の隣で率直な意見を述べる描写によって、感受性が強い反面で変えがたい強情な部分が「私」にあったことを暗示している。

ウ・説教師の言葉を通して、純粋な感情のはたらきによらずに涙してしまう傾向があることを自覚して自己嫌悪する主人公の姿が描かれている。

エ・父の体調が快復してほしいという思いにまで自己嫌悪する描写によって、詩人の道を進もうとする自分自身への複雑な心情が

暗示されている。

オ・詩才を磨くことに憧れを抱く一方で、自分を取り囲んだ説教師たちの言葉に自己抑制を奪われる「私」の青年期の苦悩が描かれている。

カ・言葉を操ることに憧れるからこそ言葉通りに感情を動かされる「私」の様子によって、矛盾の多い青年期の多感な様子が描かれている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、但馬たじまの前司ぜんじく国挙こくかたといふ人ありけり。年Aごろ、公に仕へ私を顧みてある間、身に病を受けにはかに死ぬ。

すなはち、閻魔えんまの庁へいに召されぬ。国挙見れば、罪人きはめて多かる中に、一人の小僧あり。手に一卷の文を持ちて、東西に走りめぐりて争ふことある気色けしきなり。かたはらにある人々、「この小僧は、地藏菩薩じざうぼさつにまします」といふ。国挙これを聞きて、この小僧に向かひ、地にひざまづき、涙を流して、「我思はざるほかにこの所ところに召されたり。願はくは、地藏大悲の誓ひをもつて、我を助けて許す謀はかりごとをめぐらし給へ」と申す。かくのごとくしきりに申せど、小僧答へ給ふことなく、みずから弾指して、「一人の世間の榮華はただ一日の夢幻のごとし。罪業の因縁はあたかも万劫まんじやくを重ねたる巖いはに似たり。いはんや、なんぢ常に女にふけりて多くの罪根を植ゑたり。今その罪ありてすでに召されたり。我いかでかなんちを助けん。また、なんぢ生きたりし間、全く我を敬はず。何の故ありて、我なんぢがことを知らん」とのたまひて、後ろ向きて立ち給へり。

その時に、国挙いよいよ悔い悲しみて、重ねて小僧に「なほ我を慈しみ給ひて、助け救ひて許し給へ。我もとの国に返りたらば、財を棄て、三宝に奉仕し、ひとへに地藏菩薩を帰依し奉らん」と申す。小僧これを聞き、前Bに返り向きて、「なんぢがいふところもし実ならば、我試みになんちを乞ひ請けて返し遣はすべし」とのたまひて、冥官みやうくわんの所に行きて、訴へ乞ひて、国挙を許し放つ、と思ふほどに、半日を経てよみがへりぬ。

(『今昔物語集』による)

問一 波線部A「年ごろ」・B「すなはち」の意味として最適なものの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

A 「年ごろ」

- ア・最近
- イ・若いころ
- ウ・長年
- エ・一年間
- オ・ある年

B 「すなはち」

- ア・結果的に
- イ・いかにも
- ウ・なぜか
- エ・不意に
- オ・すぐに

問二 傍線部①「かくのごとく」とあるが、国挙は地藏菩薩にどういうことを訴えたのか。三十字以内で説明せよ。

問三 傍線部②「小僧答へ給ふことなく」とあるが、地藏菩薩がそうしたのは国挙のある行動が原因となっている。その行動を簡潔に説明せよ。

問四 傍線部③「人の世間の栄華はただ一旦の夢幻のごとし。罪業の因縁はあたかも万劫を重ねたる巖に似たり。」とはどういうことか。その説明として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・人が栄える可能性は大いにあるが、それによって罪を重ねることも増すということ。

イ・人は富み栄えることを夢見るが、その過程で犯した罪はますます大きくなること。

ウ・人の寿命はあつという間に尽きてしまい、その行いに応じて生まれ変わるということ。

エ・人生の名声はあつという間に消えるが、犯した罪は永遠に消えないということ。

オ・人間の欲には限りがなく、それがゆえに数々の罪を重ねていくということ。

問五 傍線部④「我いかでかなんぢを助けん」の解釈として最適なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・私はなんとかしておまえを助けてやりたい

イ・私がどうしておまえを助けることができようか

ウ・私はどうすればおまえを助けられるのだろうか

エ・私が行かないでおまえを助けてやれるわけがない

オ・私が行くまでもなくおまえは助かることだろう

問六 傍線部⑤「後ろ向きて」と同じ態度を示す表現を本文中より四字で抜き出せ。

問七 傍線部⑥「前に振り返り向きて」とあるが、地藏菩薩がそうした理由の一つは国挙が厚く信仰を誓ったからである。もう一つの理由は何か。二十字以内で説明せよ。

白

紙

白

紙

白

紙